幼児期における社会化の担い手

鈴　木　重　夫

An Agent of Socialization for Early Childhood

SIGEO SUZUKI

緒　　言

乳児は生後2か月頃から自発的（生理的）微笑，外因性（誘発）微笑に続いて社会的微笑が出現する．これは周囲の大人等からの働きかけにより応答的に出現する微笑である．また啼泣行動も排泄等に依る不快感や苦痛・空腹等による啼泣行動のみから更に人を呼ぶ手段としての啼泣行動（社会的啼泣行動）も出現する（これは個人差が著しい）．やがて7～8か月頃から接触時間の長い母親や家族と，そうでない他の者との区別がつく，いわゆる人見知り行動が現われてくる．この頃から子どもは自分と同じ位の年齢の子どもに興味を持ち，更に歩行可能年齢（誕生後1年位）からは，それ等の子どもの側で遊ぶことに喜びを感じていくようになる．

これ等の行動は人間が生まれながらにして社会的な存在であることから当然生起してくるものと考えられる向きもあるが，しかし，これらの行動も人間としての生活環境の中で人間としての相互作用の中でこそ出現してくる行動であることに留意しなければならない．そのような行動を示す子ども達に対して，直接保育に携わる者はすべて，更に良き社会的行動が現われてくることを常に期待して各々の責務を遂行していく努力をしている．換言すれば，母親を筆頭に，保育者は乳幼児に対して，大人として，人間としての責任において，より良き社会性の発達を期待し，どのような環境を用意し，何をなすべきかを真剣に考えて行動しなければならないということである．

そこで，これらの責務を全うせんがための示唆の一端を得る為，幼児の実態を観察し，調査し，社会性の発達に資する方法を考えてみたい．

方　　法

幼児を観察し，その結果から普遍性を導き出すことは困難な業であるが，示唆を得ようとする努力は常になされなければならない．幼児に対する検査や調査も同様のことが言い得る．まして，保護者が介入する調査においては更に困難さは加わる．従ってその困難さを念頭に置きながら次のような調査・観察を実施した．

1. 幼児社会性発達検査の調査

〔注〕　この調査は，立教大学　石田恒好，東京都立教育研究所　西久保礼造，財団法人応用教育研究所　共著，日本図書文化協会発行の『改訂　幼児社会性発達検査』を用いて実施した．

尚，この調査にあたって次の3種の知能検査を併せて実施した．

(1) 教研式新訂幼児用知能検査

（「A」と略称する）

(2) 幼児用田中B式知能検査

（「B」と略称する）

(3) EIS幼児知能検査A型

（「E」と略称する）

2. 3年保育の幼稚園児13名の3年間の観察

3. 非社会的行動が認められる一幼稚園児の行動観察

以上の調査・観察を実施したのは，名古屋市内のA幼稚園に在園する，年少児（3歳児）10名，年中児（4歳児）30名，年長児（5歳児）37名，及び，以前同園に在園した3年保育児13名である．

結果と考察

1. 幼児社会性発達検査について　〔表1～表3，図1，2参照〕

回収率　年少組　11名中9名　82%

　　年中組　30名中24名　80%

　　年長組　37名中31名　84%

この検査の質問肢は，個人別側面（①自立性，②運動・安全，③遊び・仕事）と社会的側面（④友だち関係，⑤ことば，⑥集団行動），⑦生活習慣の7つの部門があり，それらの得点を総合して「社会性」の得点としている．そこで，本研究に最も関係の深いと見られる「自立性」の得点と，「集団行動」に関する得点との相関を調べてみた．

1) 年少組

男児 $r \fallingdotseq 0.72$　女児 $r \fallingdotseq 0.99$　全体 $r \fallingdotseq 0.9$

2) 年中組

男児 $r \fallingdotseq 0.69$　女児 $r \fallingdotseq 0.87$　全体 $r \fallingdotseq 0.76$

3) 年長組

男児 $r \fallingdotseq 0.68$　女児 $r \fallingdotseq 0.79$　全体 $r \fallingdotseq 0.73$

次に，幼児社会性発達検査の総合点，『社会性』と，知能検査可能な年中組・年長組に実施した3種類の知能検査（前出）から得られた知能偏差値（SS）の平均値との相関を調べた．

1) 年中組

男児 $r \fallingdotseq -0.06$　女児 $r \fallingdotseq 0.08$　全体 $r \fallingdotseq -0.19$

2) 年長組

男児 $r \fallingdotseq -0.12$　女児 $r \fallingdotseq 0.46$　全体 $r \fallingdotseq -0.13$

〔参考〕

3知能検査の知能偏差値の相関

- AとBの相関係数 r_{AB}，BとEの相関係数 r_{BE}，AとEの相関係数 r_{AE} とする．

1) 年中組の結果から

$r_{AB} \fallingdotseq 0.65$　$r_{BE} \fallingdotseq 0.63$　$r_{AE} \fallingdotseq 0.62$

2) 年長組の結果から

$r_{AB} \fallingdotseq 0.64$　$r_{BE} \fallingdotseq 0.66$　$r_{AE} \fallingdotseq 0.52$

この結果から3知能検査の相関は高く，3検査の知能偏差値の平均値を採用してもその妥当性は高いものと見た．

表1　年少組（3歳児）児

検査種別 / 被検者番号	知能検査偏差値（SS）				社会性発達検査得点		
	A	B	E	平均	自立性	集団行動	社会性（総合）
1					24	30	
2					36	37	
3					22	24	
4					24	28	
5					35	36	
6					24	22	
7					34	36	
8					36	37	
9					31	30	
10							
11							

以上の結果から，幼児の社会性の発達は，集団生活に参加することによって伸ばされる面も多いと考えられるが，同時に非常に関連を有する面に自立性があると言い得る．換言すれば，集団内で望ましい行動をとり得るためには，「自分でできることは自分でする」といったような「自立性」を育てることが大切であるということを意味している．

今ひとつの調査から，社会性の発達に関しては，知能の発達とは，ほとんど相関のないことがわかった。つまり，知能が高いとみなされる子どもの社会性がよく発達するとは言えないし，社会性の発達が思わしくないからといって知能が遅滞しているとも言えないのである．

2.　3年保育の幼稚園児3年間の継続観察．

3年保育の年少組に入園した13名をひとつの学級としてまとめ幼稚園を修了するまで，一人の教諭に担当させ3年間継続観察をした．観察の目的は，最初Leader と Follower の形成過程に置いていたが，観察経過をまとめる過程において，その13名が時には大きく2分されているような状態にいることが判明した．それはグループ構成が自然発生的に凝集されていく場面に多く見られ，2分されたひとつは，活動的とみられる子どものグループであり，いまひとつは，非活動的とみられる子どものグループである．

3年間の観察期間に観察項目の変動や評価基準の変容等があって両グループの変化等を数量化することが困難な状態になったため割愛するが，最終的にまとめた観察項目は次のようなものであった．

(1)　道徳性の発達の側面から

a　約束を守ることができたか．

b　ルールの理解はどうか．

c　ルールの設定が可能であったか．

(2)　社会性の発達の側面から

a　遊び等で協力することができたか．

b　友達を遊びに誘うことができたか．

c　リーダーシップの形成はみられたか．

d　遊びの持続時間はどうか．

e　遊びに対して共同目的の設定がなされたか．等．

表2　年中組（4歳児）

検査種別 / 被検者番号	知能検査偏差値（SS）				社会性発達検査得点		
	A	B	E	平均	自立性	集団行動	社会性（総合）
1	72	61	59	64	36	39	302
2	81	60	76				
3	80	58	69	69	34	39	263
4	52	35	58	48	42	50	344
5	86	74	85				
6					40	39	
7	67	41	52				
8	75	71	72				
9	82	67	65				
10	69	55	54	59	39	46	316
11	72	62	66	67	28	32	240
12	84	56	67	69	34	40	268
13					30	32	
14	81	52	79				
15	45	48	52	48	43	35	279
16	55	50	49	51	29	29	236
17	72	57	72	67	32	26	234
18		56	54		36	38	
19	86	54	67	69	39	43	300
20	86	64	69	73	34	37	270
21					46	42	
22	74	57	46	59	43	45	325
23	70	58	70				
24		67			45	42	
25	69	51	56	59	34	33	262
26	50	47	44				
27	58	60	75	64	28	22	200
28		81	77		31	31	
29	53	52	62	57	41	44	323
30	39	44	53	45	35	28	241

その結果をまとめてみると，活動的な子どもの集まりとみられるグループ（Aとする)と，非活動的な子どもの集まりとみられるグループ（Bとする）の間には次のような傾向がみられた．

(1) 活動性が異なるとしても，集団の持つ基本的機能性には差が認められない．

(2) グループの定着性や凝集性についても相似している．

(3) 遊びへの適応については，Aには積極性が，Bには消極性が感じられたものの，いずれも可能である．

〔例〕 • グループ以外の子どものグループへの受け入れ状態．

• 嫌いな遊びへの参加状態．等．

(4) 遊びの持続時間は全く差異がみられない．

これ等のことから集団生活の場において生起する集団内外の力学的関係は，子どもの世界において，特殊性を見出すことができると言えよう．つまり，活動的とみられる子どものグルー

表3　年長組（5歳児）

検査種別 / 被検者番号	知能検査偏差値（SS）				社会性発達検査得点		
	A	B	E	平均	自立性	集団行動	社会性（総合）
1	63	53	62	59	32	34	250
2	67	54	73	65	41	34	276
3							
4	74	72	75				
5	64	51	56	57	31	44	291
6							
7	56	53	58	56	33	38	264
8		47	66		30	36	
9	57	74	79	70	32	42	289
10	60	54	72	62	46	40	242
11	73	50	65	63	34	40	289
12	63	53	67	61	46	50	358
13	86	80	86	84	40	44	280
14		48	61		22	24	
15	81	67	85	78	39	38	313
16	46	36	47	43	45	49	337
17	74	57	66	66	41	44	330
18		65	69		36	44	
19	59	54	59	57	44	46	320
20	53	42	55	50	40	46	322
21		53	67		39	42	
22	63	47	48	56	41	40	302
23		58	81		41	40	
24	70	61	64				
25	70	53	61	62	48	42	328
26	69	48	51				
27		50	66		28	26	
28	75	60	51	67	46	50	356
29	61	54	79	55	45	40	319
30		67	65		49	49	
31	80	58	75	68	49	49	360
32	79	64	79				
33		69	59		42	47	
34	59	52	69	57	42	48	352
35	72	61	68	67	43	49	343
36	76	62	57	69	41	39	302
37	60	61	54	58	41	36	297

プの中で育ってくるものは，非活動的とみられる子どものグループの中でも育ってくるものの多いことを示してくれたのである．

幼児は，それぞれの場で，真剣に生活し，取り組み，成長の糧を得ていると言えるのではなかろうか．

3.　非社会的行動が認められる―幼稚園児の行動観察

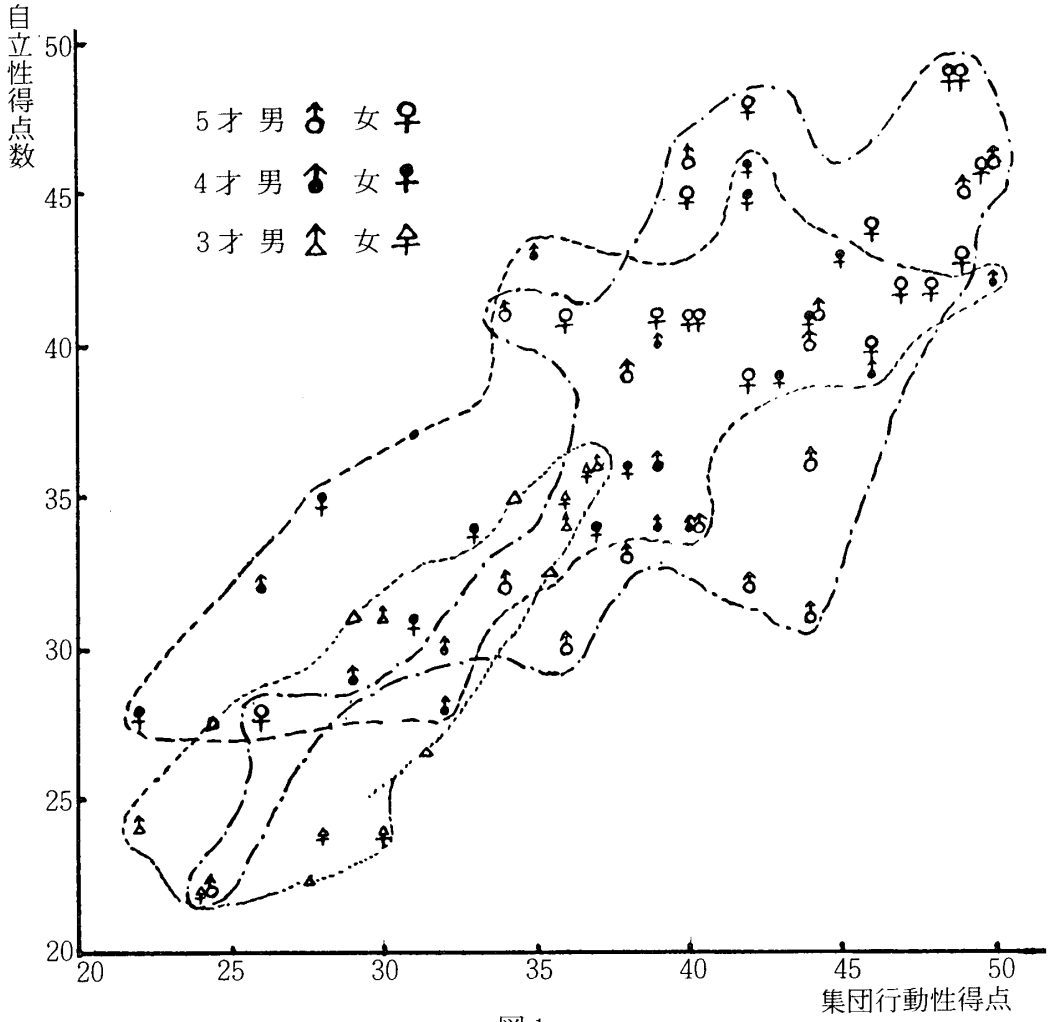

図1

〔観察記録〕

T子の母はT子を出産後，精神に異常を来たし，精神病院へ入ってしまった．当然のことながらT子は乳児院へ収容された．その後T子は施設での生活を続け5歳になった時，父親はT子の小学校入学を心配し幼稚園に入れることを決意した．2年保育・3年保育を入園させることにしていた当幼稚園は，T子の状態を理解し特別入園を認めることにした．同時にT子に対する対処のしかたについて研究討議がなされたことはいうまでもない．T子は施設病（Hospitalism）の症状を呈していたのである．幼稚園側はT子をいきなり当該年度の年長組に入れるのを避け，一年下の年中組に入れてみたのである．一向進展のないまま2学期に入ってしまったため，T子を年長組に入れ，そのかわり年長組の中で特別世話好きの女児をT子の隣の席に座らせ，T子の面倒を見るように指導した．T子の自立性を伸ばすことに力点を置いたのである．世話好きの子はよく面倒を見てくれたのであるがT子には一向進展性が見られなかった．

担任は園長と相談の上，T子と同じように自立性・自発的行動のあまり見られないM子をT子の隣の席に座わらせてみたのである．しばらくはT子とM子との間には相互交流はみられなかったが，やがて1～2週過ぎた頃から僅かずつではあるが，スモックの着せ合いや，用具の始末等，相互交流が始まったのである．

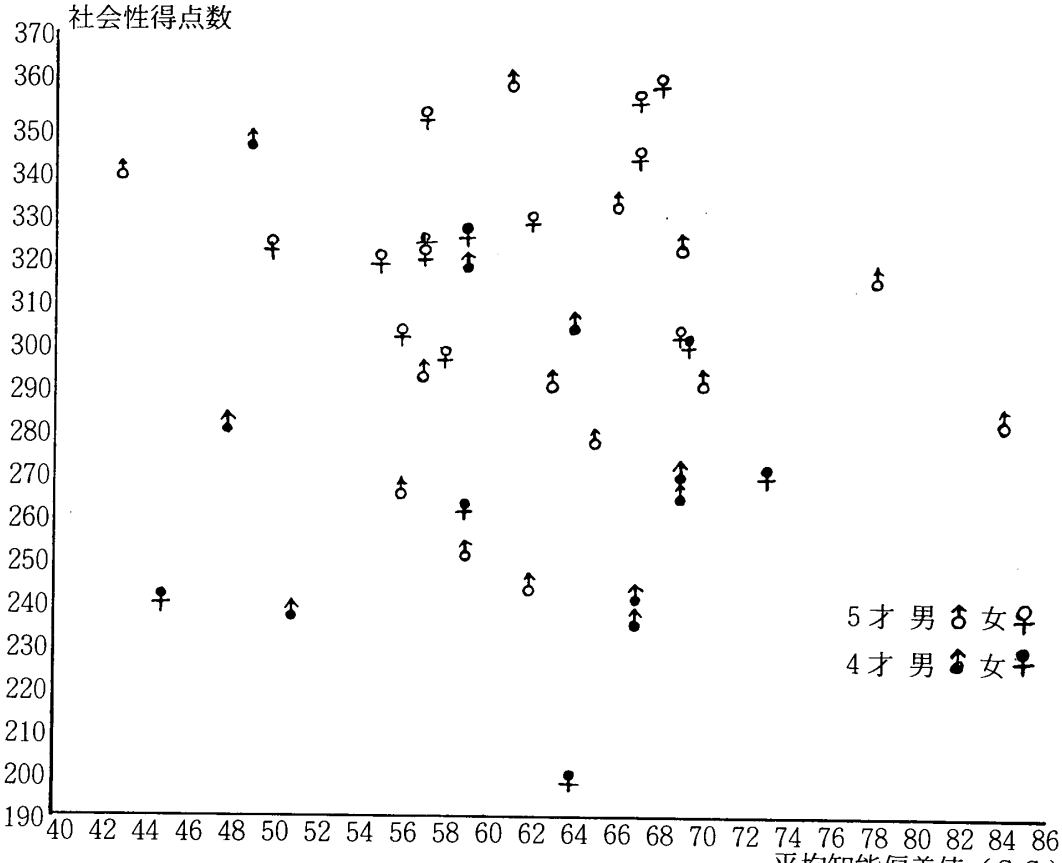

図2

交わされる言葉も，「これ」「やって」「赤借して」等短かい一語文～二語文ではあるが社会化された会話が聞かれるようになった．M子の家庭は，自家営業で父母がいつも側におり，その上，お手伝さん一人と店員四人がおり，いつも大人の手と目がM子のまわりを取り囲んでいる状態であった．

この観察事例は，言語面にしろ行動面にしろ，余りにも個人差の著しい者同志のかかわりは，一方的になってしまう傾向があって相互作用が生起しない状態になることを意味している．むしろ，活動性や行動性，言語性等が同じような子ども同志の方が相互作用が生起する可能性が高いように思われる．換言すれば，行動基準や要求水準が著しく異なる場合には，一方にはなんらの働きかけも生じないことに留意しなければならないと思う．

要　　約

保育所や幼稚園へ子どもを通わせようとする保護者の多くは（乳児やごく低年齢幼児を保育所に委託する場合は除いた方がよい），子どもが集団生活に慣れ，友達と仲よく遊ぶことが出来るようになることを期待している．特に子どもが小学校就学適齢期に近づいてくるとその期待が更に大きくなる．また，子どもの側から見れば，幼稚園就園適齢児は（3歳～5歳）特に友達と遊ぶことに興味と関心及び期待を持つ傾向が強くなり，遊びに没頭し，その活動によって幼児なりの情緒的な安定が招来される．

集団の中での生活を体験することによって大いに社会的な側面が発達する．しかし，その基礎が集団生活に入る以前の家族の一員として位置する時の個人的生活の中にもあることを明記しておかなければならない．

また，集団の中に居れば社会性は育つものであるといった安易な考えは持つべきではない．これ等のことを調査や観察をもとに次のようにまとめてみた．

1. 社会性の発達には自立性の確立が大きな基盤のひとつになっている．従って，幼児，特に幼児前期においては生活習慣の確立が重要である．
2. 集団生活の中においては，活動的であることは望ましいことではあるが，その多少を問題にするのではなく，友人とのかかわりの中味（力学的関係）を考えることが大切である．

   時には，けんかやいさかいが起きたとしても全体的に見て，子どもの属する集団が，その子どもにとって，時には快い，安定して活動し生活し得るものを持っているかどうか留意する必要がある．
3. 社会性の発達を早急に求めるのではなく，それぞれの幼児の発育発達の状態を配慮し，性格や生活環境，要求水準等に適合する働きかけや，環境（人的・物的）の適切さを考える必要がある．

以上，幼児の社会化の担い手は，家庭や保育所・幼稚園の中に多く存在することは言をまたないが，各々の担い手が，それぞれの立場において工夫や配慮が必要なことを強調したい．

参　考　文　献

1）　二木　武・川井　尚編著：乳児の行動発達と保育看護，川島書店，1980，

2）　成田錠一編：乳幼児の社会指導，北大路書房，1978，